
風邪は夏にひけ！

天野 雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風邪は夏にひけ！

【Nコード】

N2600C

【作者名】

天野 雀

【あらすじ】

夏休みの第四週。風邪をひいた。夢を見た。「もう、なにやってるのよ」「彼女の声がある。ああ、夢でいいからもうちょっと見てたかったな。

ばかは風邪ひかないのよ、と言ったのは彼女だった。

じゃあおれは平気かな、と言ったのは、……はて、誰だったか。

僕はベッドから見上げるクリーム色の天井へ現れた体温計を見て、思わずため息がもれた。

カレンダーは8月の27。

体温計は38.3度。

遊びもラストスパートに差し掛かったこの時期に、あいつの胸より立派な夏風邪だった。

ごろりとみじろぎすると、開いた扉から居間が見える。

ちゃぶ台とまで言わないが、それでも十分小さなテーブルが見える。

その上に、なんたる、……ペン立てかな。そいつが居心地悪げにポツン、って感じで立っている。その下にあるのはお金。たぶん1000円だ。

「あゝ、やば」

ぼーとしてるのが自分でも分かる。

そっぴやオカン、居ないんだっけ。

いけない。なんか、また眠く、なって……。

確か今日……、僕には約束が……。

……。

がちゃん、て音がした。

お母さん、帰ってきたのかな。

声を出すのもめんどろで、体も頭もまだ半分以上が眠ったままだ。体中がまるで火が付いたみたいに熱くて、意識全体に霧がかかっている。

それも、次の光景を見た時全部納得した。

「あゝ、もう。私との約束すっぴかしてなにやってんのかと思った

ら、ホントなにやってるのよ」

なんだ、夢か。由香が僕の部屋に居るなんて、本当夢だとしても小学生ぶりじゃないか。

「なにぼーっとしてんのよ。あ、私がここに居るのが不思議なのね？」

ふふーん、と由香は得意げに自慢の胸を反らした。

「秘密よ秘密。おしえてあげない」

言いながら由香が近寄って来る。

「……う、なによそんな顔して。教えて欲しいの？」

こくん、と頷く。

「う、く、いつになく素直ね。隠してるこっちがばかみたいじゃない。……いーわよ、教えたいげる。おばさんに商店街であったのよ。それだけ。深い意味なんてないんだから」

そうか。商店街だ。僕は約束をすっぱかすのか。いや、もうすっぱかしたのか。由香は、来ない僕をずっと待っていたのだろうか。

「なによ、気にしてんの？ ばっか、しょうがないじゃない。風邪ひいちゃったんなら。もう」

普段もそれくらい素直なら可愛げがあるのに、とほんのりと赤らめた頬をかきながら照れ隠しする彼女。

「ばか、可愛いのはそっちだ。普段からそれくらい愛嬌があれば……あれば、僕だって……」

でも夢ってのは本当にいいもんだ。

近寄って来た由香は僕の額に手をおくと

「あちっ」と手を大袈裟に手を引っ込めた。

「汗もすごいわね。うん、ちょっと待ってて」

居間の方へ引っ込んで行く由香。

あーあ、もつと顔をじつくり見てたかったのに残念。

それから由香はいろいろと僕の面倒をみてくれた。

タオルで汗をふき、氷枕を持って来てくれて、体温計で熱をはかって、果てはおかゆまで作って食べさせてくれた。

由香は終始ニコニコとご機嫌で、ちよつと後が怖いくらいだった。でもこれは夢だから後を怖がることもない。

ああ、なんて天国なんだ。あのいっつもふくれっ面しか僕に見せてくれず、たまに笑顔を見れた日には心の中でガッツポーズに雄叫びまでしてしまうほどレアな由香の笑顔が、ずっと見ていられるなんて。

ああ、でもこれは夢。

僕の夢なんだよなあ。

それはちよつと残念。

これが現実だったら、僕は由香に告白したっていい。

ずっと好きでした、って。

もういつからとか分からないくらい前から好きでした、って。

いつも意地悪なこと言っでごめん、って謝ったっていい。

ほら、男の子は好きな子のことをいじめたくなるってやつだよ、なんてこつ恥ずかしいことだって言ったっていい。いや、言ってやるう。それであいつの恥ずかしがる姿を見るんだ。クールキャラぶってるけど、あいつは本当にこの手の話に弱いんだ。きっと顔を真っ赤にして恥ずかしがるぞ。うん、なんかそれ、いいな。サイコーだ。サイコーだよ、そんな未来。

でも現実はそのうまくなんていかない。

夢の中だって、ほら……

「そろそろ、帰らなきゃ」

由香が心の底から残念そうに言った。

その声に、その事実には、ドキリと胸が高鳴った。

「ちよつと、どうしたのよ。ホント今日はらしくないわね」

わがママを言うわが子をあやすような、そんな甘い声で彼女は言った。らしくないのはお前もいっしょだぞ。うん。

「じゃあ、目を閉じて」

言われたとおりに目を閉じる。やさしい闇が体を包んだ。

彼女はやさしい声で、なつかしい子守歌を歌った。小学生のころ、

歌を知らなかった僕たちがいつかいつしよに歌っていた曲だった。
とん、とん、とゆっくりとした子守歌のリズムで、由香が僕の胸
をたたいている。だんだんと、ねむく、なってきた。

ねむく、く……

「たまなら良いけど、やっぱり物足りないわ。はやく元気になって
お互い皮肉り合おう?」

ちゅ、と。

甘い何かが一瞬だけ唇にふれた気がした。

……………。

……………。

「…………とまあこんな夢をみたんだが。これって欲望が夢になったっ
てヤツ? なんか末期症状だよなあ。なあ、おれってあいつに告白
するべきかなあ?」

「なあ親友。知ってるか? ばかは風邪ひかないってよくいうけど、

夏風邪は誰がひくのかさ」

「???」

名残惜しいと蝉せみが鳴く、9月1日のとある日常。

どっかの彼女が数分前、彼氏の親友に愚痴をこぼしていたことに
彼氏が気付くはずも無く。

(後書き)

SSっていいなー、とかぼーっと考えてたら空から物語が降臨しました。突発シリーズ第一弾。ついでに初SSです。なにがしたかったのかは不明。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2600c/>

風邪は夏にひけ！

2010年10月8日15時50分発行